

## レクリエーション利用と風景

奥 敬一（森林総合研究所 関西支所）

ひとつの森林が、どのような方向に向かうのかは、その森林をとりまく多様な人々が、その森林から見出す価値のせめぎあいの中で規定されてくる。経済的価値や生態学的な価値とともに、風景やレクリエーション環境としての価値もまた、その過程において重要な役割を果たしている。このような、場所への愛着（トポフィリア）に関連するような価値は、個々人の中での優先順位は、普段決して高くないにもかかわらず、ときには森林に関わって行動するための強い動機づけを生み出すものとなりうる。

発表では、主に近畿周辺のレクリエーション林を対象に、そこを訪れる利用者が風景をどのように体験し、レクリエーションの環境としてどのように評価しているのかを、方法論的な観点も含めて報告する。また、一般の個人が環境を評価するための情報の多くは視覚的な景観から得られていることに鑑み、写真を手がかりとした景観評価と他の様々な価値評価との関連を探る方法についても紹介したい。

とかく生態学からは縁遠いと思われがちな、人間のふるまい方の研究であるが、意外と共通の手法、解析、アイデアが通用することも多い。今回の発表で、そのあたりの橋渡しができればと思っている。